

サービス低下する！ますます過疎になる！ 大きな箱ものより住民サービスを！

安塚、大島両地域協議会で産建グループ集約化に異論続出

20日、21日と安塚区、大島区の地域協議会が開催され、総合事務所の見直し問題で激しい議論が繰り広げられました。特に、豪雪、地震、豪雨と災害が続いた大島区では、「市民サービス低下になるし、過疎化にもつながる。しかも24年度からすぐするなんてもつてのほかだ。納得できない」など強い反対の声が相次ぎました。

総合事務所見直しにあたって市は、平成24年度から大島区、安塚区の産業建設グループ職員を、浦川原区に集約するなかで、13区のブロック化と基幹的な総合事務所の試行をやるうとしていきます。両区の地域協議会では、人事課の幹部が方針の説明にあたりましたが、地域協議会委員の理解を得られないう事態となりました。「ここは反対

だ。再考してもらえないか」（大島区・内山實委員）との質問に、岩野人事課長は、「報告する。そういうなかで上司がどう判断されるかだ。持ち帰らせていただく」と答えざるを得ませんでした。

安塚区と大島区地域協議会では全委員が発言されました。いずれも重要な発言ですが、紙面の都合上、いくつかにしぼって掲載させていただきます。なお、私のブログにも紹介しましたので、ごらんください。

【安塚区地域協議会】

◎合併して10年も経たないうちに職員が（大きく）減るといのは困る。豪雪地帯であるので産業建設は大事なグループだ。偶々までまわっていただけではないのか。

◎役所を一つにするために合併したわけではない。ひとつにすれば、確かに役所の中の動きは良くなる。図面なんか描くには良いかもしれない。でも、私たちの山の現場がぬけた時に対応できますか。お金がないからやるというのが見え見えだ。

◎サービス低下しないと行われても、果たして、その通りに進むか不安だ。もっと市民に説明する機会をつくるべきだ。

【大島区地域協議会】

◎合併すれば良くなるという気持ちで合併したが、まったく良くならない。市民サービス低下になるし、過疎化にもつながる。24年度からすぐするなんてもつてのほかだ。納得できない。

◎いまの組織は合併協議の決定事項だ。日常生活に必要な行政サービスを身近な総合事務所へ迅速に提供していくことになっていく。合併して10年も経たないうちに骨抜きにするというのは理解できない。

◎上からの目線で住民サービス低下しないなんていわれても、みんなそう思わない。私たちは説明を求めているというよりも私たちの意見を聴いてほしいのだ。

◎（旧上越市内に）大きな箱ものをつくるという話が出ている。合併協議では、新市建設計画が終わるまでは、大型事業は新規にやらないものとするという申し合わせがあったはずだ。大型（建設事業）もやるとなれば、金が足りなくなるのは当たり前だ。



写真上は安塚区地域協議会での審議の様子（20日、撮影）。下は大島区地域協議会で説明する岩野人事課長。（21日、橋爪が撮影）

春よ来い 第一八三回 対面キッチン

コタツで横になつてうとうとしていたら、義母と妻、義兄の楽しそうな笑い声が目覚めました。先日、柏崎市にある妻の実家を訪れた時のことです。

義父の一周忌法要も終わり、ひと区切りがついたという気持ちがあるのでしょうか、親子三人の会話にはとても明るい調子があつて、居間と台所を改造する話で盛り上がっていました。

「私だって、あててるよ。間に合わなくなつて失敗するよりもいいじゃない」
義母が言うのはオムツのことです。三人の間では寝室とトイレの距離のことが話題になつていたのでした。

柏崎の家はずっと前からの農家で、一階だけでも大きな部屋が三つもあります。そのうちのひとつは、義父母の寝室として使っていました。ところが、そこはトイレからもっとも遠い位置にあるのです。義父が闘病中は、トイレまでの距離がかなりあつて、間に合わないこともありました。

そこで義兄が打ち出した改造プランのひとつは、現在、台所として使用している部屋を義母の寝室にするということでした。これなら、すぐ隣がトイレということになるので、心配が一つ減ると言うのです。

義母は改造にあつて、自分なりのイメージを膨らませていました。自分の寝室はできるだけコンパクトにし、あまり動きまわらなくていいようにする。手が届くところに整理棚があつて、冷蔵庫は小さなものもいい。どうやら、病院の個室のことが頭に入っているらしいのです。

いまの台所を寝室にするとなると、今度は台所をどこにするかを決めなくてはなりません。義兄は現在の居間を台所にするという計画をまとめていました。すでに業者さんに計画図面を渡していたので、それを見ることはできませんでしたが、義兄は私と妻に説明するためキッチンセットなどのカタログを持ってきて、「対面キッチンにすることにしたんだ」と言いました。

「なーに、その対面キッチンって……」
私がそう言うと、妻が笑いながら言いました。

「あら、あんた、知らないの、うちもそうよ。人の顔を見ながら、料理でも茶わん洗いでも何でもできるよになつてる、だから対面キッチンというの」

義母との話し合いで義兄が対面キッチンを選んだのは、顔が見えるからだけではありません。出来上がった料理は台の上の乗せ、それをテーブルに移せばそれでいい。歩いて料理を運ぶ必要がなくなるのも魅力だったのです。もっともわが家のように、出来上がった料理をコタツまで運んでいると、その魅力は感じませんが……。

対面キッチンの話になつたところで、台所からピーピーという音が聞こえてきました。冷蔵庫のドアが開けっ放しになつていないことを知らせる音です。義兄が閉めに行かため立ちあがると、義母が笑いながら小さな声で言いました。

「流しくらい、おら、出すわーな」

義兄が私たちの前で、「最後の親孝行だ」と言つたところを見ると、今回の改造計画は義兄がお金の工面もしたようです。工事は今月から始まって来月には完成の予定とか。完成した時、八七歳の義母は対面キッチンでどんな笑顔を見せてくれるのでしょうか。吉川の特産、さるなしワインでも持参してお祝いに行こうと思います。

農業委員会駐在室も基幹的総合事務所に集約化か

19日の市議会中山間地対策特別委員会において、農業委員会の寺田清二事務局長は、来年度、大島・安塚・浦川原の3区で試行される産業建設グループの集約化にあたっては、農業委員会の駐在室も「ついていくことが大前提となる」とのべ、注目されました。これは山崎一勇議員の質問に答えたものです。

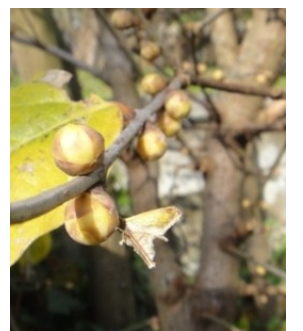
山崎議員は、「農業委員会事務まで基幹的事務所に集約されると、大島や安塚でやっていたものを浦川原でやるということになると、面倒くさいということ（農地の）荒廃に拍車がかかるのではないかと懸念を持っている。農業委員会事務だけは各総合事務所に置くということならいいが、どうなっているか」と質問。これに対して寺田事務局長は、「人員配置については基本的には人事課の判断となる。各駐在室は産業建設グループと、特に農林水産部と表裏一体だ。農業委員会だけが残っていても連絡というものもあるし、うまくはない。グループに付いていくというのが大前提となる。ただ、駐在室は動いても地元には農業委員がおるので、そこで対応することになる」と答えたのです。これにはびっくりしました。

山崎議員は、この答弁に納得せず、「机上の議論でやるとそうなる。だけど現実論から言えば、懸念されることがあれば、住民説明の中でしっかりとやっても

らわないと困る。そのことが中山間地対策で大事なことだ」と批判しました。

私も「（総合事務所の見直し）駐在室の再編まで来年及ぶということになると、これは関係農家にとっては重要な問題となる。市長部局ではなくて、農業委員会という独立した行政機関の仕事をどうするかという問題だ。産業建設グループがどうなるかこうなるかということに伴って農業委員会をどうするかという話ではない。農業委員会としてどう地域農業を守るかという観点で独自の検討をすべきだ」と発言しました。

14市町村の合併に伴う農業委員会の合併協議には私も参加してきた経過があります。合併で懸念されたことのひとつは、現地調査や農家からの相談に対応できるかどうかでした。合併後、旧町村には駐在室が設置されたものの、合併前に比べて組織は弱体化しました。昨日の説明では、農家からますます遠い存在となるという感じがしました。農業委員会は市長部局の下請け機関ではありません。もっと主体性を持つてほしいものです。



蠟梅（ロウバイ）がふくらみはじめました。柿崎区馬正面にて撮影。